

ペテガリ岳で逝った登山家・ 長原孝友さんの思い出

札幌市医師会
平岸本町内科クリニック

小林 博昭

登山家の長原孝友さんは、中国のミニヤコンガに日本人として初めて登頂、アラスカのデナリ(=マッキンリー山)のカシンリッジという難しいコースからの登頂という素晴らしい実績を持った方です。デナリでの初めのチャレンジは、ベルギーから来ていた青年2人のレスキューのため用意していった器材を使い切ってしまう、ノーマルルートからの登頂だけで帰国しましたが、4年後に成功しています。

このように立派な登山家の長原さんに、私は長い間、登山、沢登り、山スキーのガイドをお願いし、たくさんの感動・感激を頂きました。ほとんどの山行は、長原さんの奥さんと同じくプロの登山ガイドの理恵子さんも一緒でした。われわれ3人での最後の山行となったのは、平成29年7月の暑寒別岳、群別岳への沢登りでした。炎天下、川の中をジャブジャブ歩き、途中で大きなヤマベを釣り、夜は楽しい酒盛りでした。翌日は遡上中、突然雨が降り出し、川の水位があつという間に1m以上上昇し、大きな木が根こそぎ流れてくる濁流となってしまいました。とても川の中は歩けないため(登山道はもちろんありません)、小高い平地にテントを張って、そのまま停滞となりました。小さな溪流でも雨とは恐ろしいもの、朝テントを撤収していなかったらと思うとゾッとしました。クワウンナイ川の時も雨に降られました。こんな山の中にピロードのような苔に覆われた川底が続くのかと驚きましたが、一番の感動は、源頭部の水の湧き出る様を見たことです。これは“神々の遊ぶ庭”のトムラウシの沢登り、トレーニングで入った漁岳の源頭部でも感じました。

道内のたくさんの山に連れていっていただきました。長原さんが中富良野町の自宅の隣に建てられた山小屋(ねこやなぎやま山荘)に泊めていただき、ここを拠点にして、(山荘の目の前に展開する)富良野岳、上ホロカメットク山、十勝岳、美瑛岳、美瑛富士、オプタテシケ山(何度かに分けて)までつながりました。また山荘の右手に見える芦別岳へは、本谷コース、旧コース、新コース3つとも登れました。私の故郷の夕張岳へも、夕張から見て向こう側の金山コースから連れていっていただきました。

また日高の山では、2回もセツ沼へ行くことができました。1839峰へ行った時も長原さんの驚異的な体力を見せていただきました。私は荷物を持たないでフラフラになってテントに戻りましたが、長原さんは先行して谷まで水を汲みに行き、かつ先にテント

に戻っていました。この時、コイカクシュサツナイ岳のテントから帯広と日高富川の花火大会が右左同時に見えて不思議な感じてした。

カムエクから1823峰へ行った時は、登山道が荒れていて、ハイマツ、笹だらけのため、途中で真っ暗になり(ヘッドランプは使っています)、これが遭難かなーとっていると、長原さんは全く動ぜず「ハイマツの上にテントを張りましょう」。さすがに火は使えないため、持っていたカステラで夕食にしました。

熊にも何度か遭遇しましたが、1番は羅臼岳から硫黄山へ縦走途中で、われわれの5~6m前を親子熊が横切って、そのまま脇のお花畑でコケモモの実を食べだしました。3人全員熊スプレーを構え、ギリギリと後退しました。迫力がありました。山スキーでは、羊蹄山でクマゲラ、チセヌプリで白い野ウサギを見ることができましたが、こちらは可愛かったです。大雪山でも今まで見たことがない絶景、花、紅葉と、季節ごとに楽しませていただきました。

本州の山へも何度か連れていっていただきました。岩手山、出羽三山に登った時は、わが家のジープを長原さん夫妻にフェリーで運んでいただき、私とカミさんは飛行機で行くことができました(カミさんは登山ではなく、麓の盛岡などでショッピングです)。岩手山頂上ではカモシカ親子と広大なコマクサだけのお花畑に感動しました。コマクサは北海道が1番ではないことを知りました。羽黒山での五重塔は荘厳でした、月山ではわれわれはリフトのあと、ツボ足でしたが、6月なのにスキー場は最盛期でした。また、この遠征で銀山温泉、乳頭温泉、おいしいソバ屋さんなどにも行くことができました。私の情報収集能力、手配力では絶対無理な山行でした。

ほかに本州では、日本の標高第2位、3位の北岳、間の岳、そして農鳥岳へ登らせていただき、これで私は日本の高さNo.1~No.4まで登ることができました。

長原さん、長い間大変お世話になりました。

ありがとうございます。

安らかにお休みください。